

開発試験から

渡辺 啓 著

晩秋に外国の林木育種の研究者が20名ほど現場を視察した。カンバ集植所でイタリアのアバンゾー氏がヤマイグチをつまみあげて「造林地に菌根を利用しているか」との質問があって「現場では研究のスタートをしたところだ」と答えたが「イタリアには自生のマツが2種類あって、その林内で菌根をつくるチチアワタケを造林地に植えこんで、林木の生長をうながすようにしている」とのことであった。

樹病科の村田研究員によれば、基礎研究はスウェーデンが盛んで、応用面ではアメリカ、カナダ、オーストラリアがとりあげているという、主に乾燥気味の苗圃に使っているそうである。日本では古くに増井、田添両氏の研究があるが、現在では皆無の状態で、現場ではさしあたりカラマツ林についての菌根の研究をしようとしている。肥えた土壌には1グラム当り25億の細菌がいるという報告があるが、人目につかない土中の探索から、育成林業に対する未知の知識をさすけられることだろう。

カラマツ造林では小径間伐木の利用が経済面から困難視されている。間伐がおくると林全体が悪くなるから、助成金をだして間伐を推進しているところもあるようだが、間伐したものを林内に捨てておくとカラマツヤツバキイの繁殖をさそう心配もでてくる。カラマツ造林木にはナラタケ病害があるが、これを逆手にとってこの菌を間伐木に接種してナラタケを生産するというのはどうだろう。樹病科で考え中だが、読者も試して下さるとありがたい。

造林樹種の多様化を考えて欧米産のもの50種150系統を実験林でテスト中だが、森田造林科長によれば、ヨーロッパハトウヒと改良ポプラに期待のもてるものがあるほかは、現在実用性に乏しいとのことである。明治からの導入試験と似た結果で、トドマツ、カラマツといった手馴れたものがやはり安定しているようだ。

トドマツでは精英樹の子供を各地に植えた結果から、産地によって成績がかなり違うことがわかってきた。寒害面から東西に分つ2つの種子供給圏が考えられるという。

カラマツは野鼠害が欠点なので、カラマツとグイマツの交配種から耐鼠性がある生長のよいものを求めているが、この点からは効果がみとめられるようであるが、富山育種科長と小口樹病科長によれば、千鳥系グイマツをつかったものに比べて、カラフト系のはかなりサキガレ病にかかるという。またグイマツはナラタケ病、落葉病にかかりやすいというから、カラマツの優位性は高いものようだ。

開発試験から実用化されるものは少ないようであるが、そのことを通してあらためて、郷土の自然が育てているものと先人の業績を見直すことが多いようである。林業の研究のように長期にわたるものはとくに、温故知新、可以為師矣ということになるだろう。

(経営保護部長)